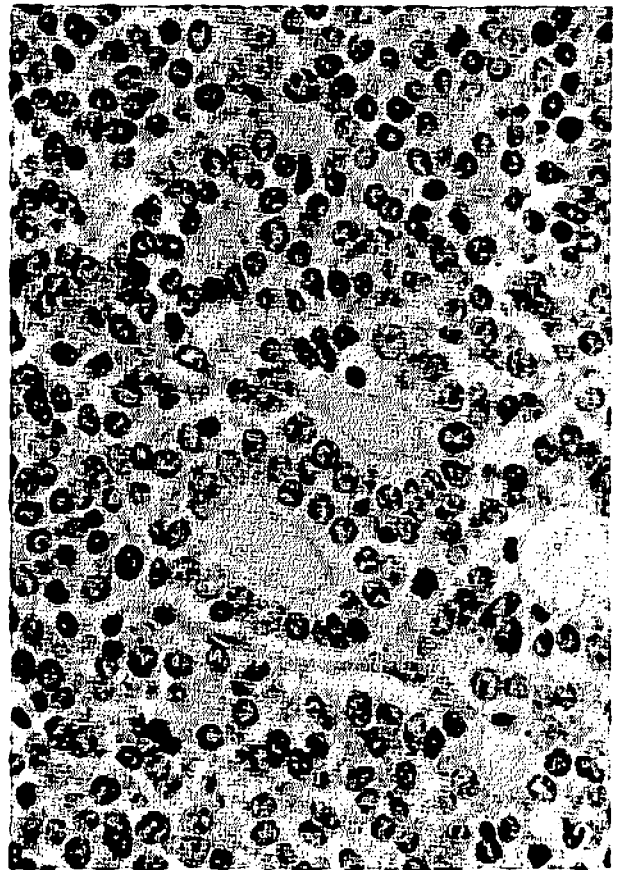
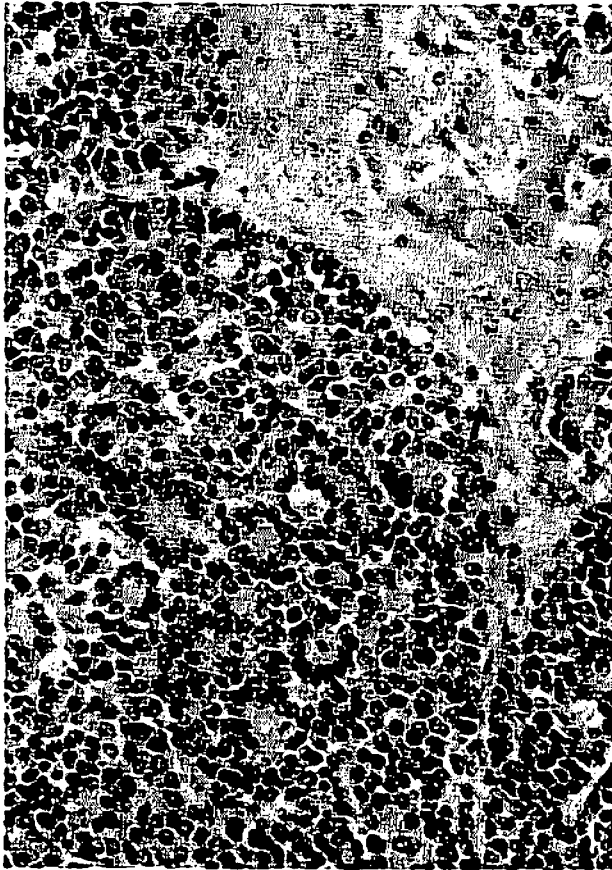


# 犬の肝の転移性上皮性腫瘍

農林省家畜衛生試験場北海道支場出題  
第9回獣医病理学研修会標本No. 132



犬、コッカスバニール種、雌、2才、室蘭産。1968年8月15日から元気、食欲なく、2日前より嘔吐するという稟告で8月31日に初診した。被毛は粗剛、栄養は中等、臍部から肋骨辺縁部にわたる膨隆が著しい腹囲膨満を認めた。腹部触診で腸閉塞を疑って開腹手術をし、腫瘍性病変を認めたので予後不良として殺処分にした。なお、治療としてはグロンサン40%液を40cc静脈注射したのみであった。

剖検所見：肝全般に出血を伴う灰白色くすみ大なし小豆大腫瘍が散在し、胃底部、十二指腸、腸間膜に指頭大の腫瘍があった。さらに、腸間膜には米粒大なし小豆大の腫瘍がびまん性に拡がっていた。

組織学的所見：腫瘍細胞の核は1ないし2箇の核小体をもち染色質の乏しい卵円形ないし円形である。細胞質の分界は一般に不明瞭であるが、腺様配列を示す部分が多くみられ、小皮縁様構造も認めるものもある。腫瘍細胞の増殖は脈管を迂る浸潤の形がみられ、少量の結合織に分画されて集団をなし癌胞巣構造がみられる。このた

め固有の肝細胞は圧排されて萎縮し、肝小葉像は乱れている。腫瘍細胞の集団の中では血行障害による血液うつ滞、出血が認められ、所によっては出血による壊死がある。腫瘍細胞を支える結合織の発達は悪く、嗜銀線維は認めない。腺様配列を示す腫瘍細胞には分泌像はない。この腫瘍細胞は腹膜、臍にも浸潤増殖を示し、肝におけるものと同様に腺様配列を認めた。

組織学的診断：腫瘍細胞の起源については、腫瘍発生部位の状況から肝細胞、胆管上皮、膵管上皮および腸腺上皮細胞などが検討の対象になるが何れも類似性を求め難い。腫瘍細胞は原始卵胞における顆粒膜細胞に似た細胞配列（ロゼット）を認めることから卵巣由来の可能性も考えられる。本例の検索範囲では、肝に転移を認めた上皮性腫瘍としておき、今後の類似例における比較検討に待ちたい。

写真No.1 腫瘍細胞に圧排された肝細胞塊（↓）。線維増生は認められない。

写真No.2：腺様配列を示す腫瘍細胞。